

高等学校

平成 14 年 度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教職員研修センター

平成14年度

教育研究員名簿

◎世話人 ○副世話人

NO	学区	学校名	氏名
1	1	都立南高等学校	藤村由夏
2	2	都立松原高等学校	○大石真二
3	2	都立桜町高等学校	清水郁子
4	2	都立世田谷泉高等学校	関根春幸
5	5	都立台東商業高等学校	黒田正
6	7	都立成瀬高等学校	◎原誠一郎
7	8	都立秋留台高等学校	菅原奈麻美
8	9	都立国分寺高等学校	藤野明彦
9	10	都立稲城高等学校	北山富美江
10	11	都立大島南高等学校	鈴木光俊

担当 東京都教職員研修センター指導主事 田中均

研究主題 課題を探究し在り方生き方を考察する学習活動と指導の工夫 －指導のねらいと評価の観点を明らかにして－

I 研究主題の設定

1	高等学校の総合的な学習の時間の特質	2
2	主題設定の理由	3

II 研究の全体構想

1	総合的な学習の時間で育成する力	3
2	研究仮説	4
3	研究のねらい	6

III 研究の内容

1	体験的な学習を重視した総合的な学習の時間	
	(1) 学習活動や指導と評価の工夫	7
	(2) 学習活動の展開	8
	(3) 実践の記録（福祉体験から在り方生き方を考える）	10
	(4) 研究全体との関連	13
	(5) 実践に当たっての資料	14
2	課題探究を重視した総合的な学習の時間	
	(1) 学習活動や指導と評価の工夫	15
	(2) 学習活動の展開	16
	(3) 実践の記録（情報活用と表現する体験で課題解決を図る）	18
	(4) 研究全体との関連	21
	(5) 実践に当たっての資料	21

IV 研究のまとめ

1	実践を通じて見られた生徒の変容	23
2	研究の意義と今後の課題	24

1 研究主題の設定

1 高等学校の総合的な学習の時間の特質

平成10年7月の教育課程審議会答申の中で、「ゆとり」の中で自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」は全人的な力であると述べていることを踏まえ、国際化や情報化をはじめ社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するために、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習をより円滑に実施する「総合的な学習の時間」が創設された。

来年度（平成15年度）からの新教育課程全面実施を直前にひかえ、学習指導要領に示されたねらいを実現する学習活動や指導、評価のための研究が必要である。

小・中学校での「総合的な学習の時間」は平成12年からの移行期間を経て今年度全面実施され、「総合的な学習の時間」の学習経験をもつ生徒が平成15年度から高等学校に入学してくる。小・中学校での学習経験を生かし、高等学校の総合的な学習の時間の特質を踏まえた研究が必要である。そこで学習指導要領に記載されている各校種のねらい及び課題を精査し、研究内容等に生かしていこうと考えた。

ねらい（小・中・高等学校共通）	
①自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。	
②学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。	
小・中学校共通で例示されている課題	高等学校で例示されている課題
①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動。	①国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動。
②児童の興味・関心に基づく課題についての学習活動。	②生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動。
③地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動など	③自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動。

小・中・高等学校共通して、現実の社会の中でたくましく生きていくために必要な問題解決能力の育成や、そのために学び方を学ぶこと、主体的に取り組む態度を育てることを通じて、生き方を考える必要性が示されている。高等学校では、学習活動の内容として「進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動」と「自己の在り方や生き方について考察する学習活動」が例示されている。小・中学校の学習を踏まえ、知識や技能を総合的に発展させて身に付けること、一人一人に即した学習課題が重視されること、学習したことを自分とかかわらせ在り方生き方をさらに深く考察することが、高等学校の総合的な学習の時間の特質であると考えられる。これらの学習活動を通じて、生涯を通じて学び続ける力としての自己教育力を育成することが高等学校の役割であると考えた。

2 主題設定の理由

高等学校における「総合的な学習の時間」の特質を踏まえ、自己教育力をはぐくむことをねらいとする時間として考え、研究主題を「課題を探究し在り方生き方を考察する学習活動と指導の工夫」とした。

「総合的な学習の時間」の指導と評価にあたっては、今までありがちだった知識を教え込む学習活動や評価の在り方を改めて、生徒たちがどのような変化をしたか、どれだけ進歩したか、生徒のよい点、可能性、進歩の状況を捉えることのできる評価内容や方法の開発が必要であり、生徒の何を育てたいのかという点を明らかにする必要があることから、「指導のねらいと評価の観点を明らかにして」を本研究の副主題とした。

II 研究の全体構想

1 総合的な学習の時間で育成する力

自分の学習過程や学習成果を認知し、学習課題をとらえて適切な学習方法を選択できる力は自己教育力の育成に不可欠である。こうしたメタ認知ともいう力は心身の成長とともに除々に獲得されるものである。高等学校においては、小・中学校で身に付けてきた知識や理解、学習の方法などを土台にして、これらの力が総合的に働く学習活動や学習の場面を作ることや、教師やさまざまな指導者の助言などを得る機会を作ること、メタ認知の力を伸ばし自己教育力を培っていく学習経験をもつことが大切である。

研究に当たっては、総合的な学習の時間で身に付けることを期待するメタ認知の力の内容を明らかにするために、平成13年度「東京の教育21」研究開発委員会教育課題部会〔総合的な学習の時間〕の報告で示された「総合的な学習の時間」における四つの評価領域（①情意領域、②知力領域、③技能領域、④認知領域）を手がかりとした。情意的な力、知的な力、技能的な力、認知的な力、それぞれが自己教育力の構成領域であると考えた。また、学習の対象に対する関心・意欲が高まると、探究する方法を身に付けたり、技能を獲得したりする学習活動が生まれ知的な課題探究の力が高まっていくこと、探究する力が関心・意欲の高まりによって刺激され課題を解決する活動への取り組みを生みそのためにさまざまな学習の方法を身に付けようになることなど、それぞれの領域が相互に働きかけあいながら自己教育力を高めていく過程があることに着目して、次のような力（能力）の相関図を作成した（図1）。

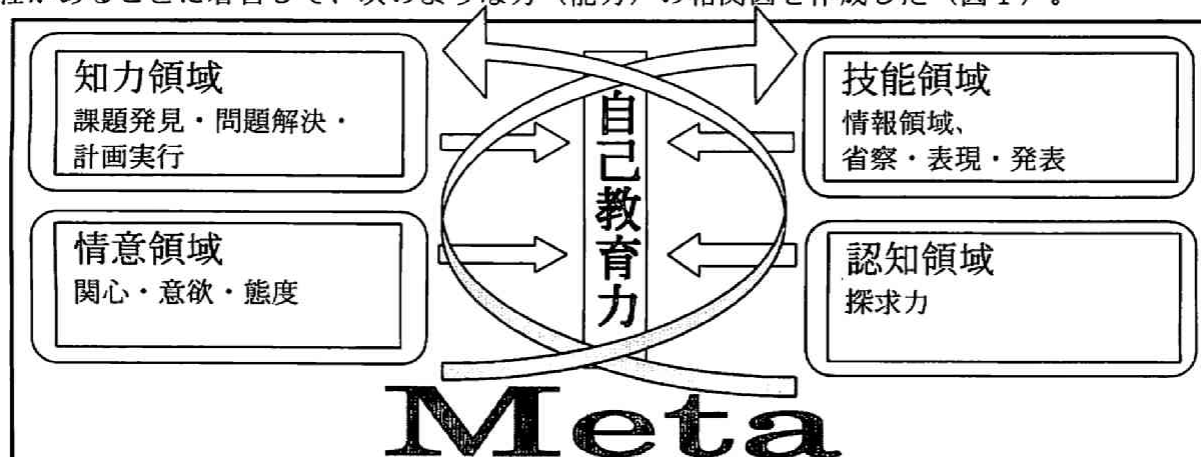


図1 力（能力）の相関図

2 研究の仮説

学習活動の流れの中で総合的な学習の時間で育成することを目指す力を身に付けるためには、個に応じた学習の発展段階を構想することが必要であり、次の研究仮説を考えた。

研究仮説1 自己認知・課題探究・自己評価という3段階を、高等学校の「総合的な学習の時間」の学習過程の基本として構想することによって、一人一人の生徒が自ら自己教育力を培う学習活動を豊かに構想し、効果的な指導・評価を行うことができる。

学習の発展段階と目指す生徒像

自己評価

- ・ ちょっとやる気が出てきたぞ！
- ・ 自信持っちゃおうかな・・・
- ・ 次こそ完ペキなものに仕上げろぞ！
- ・ やればできるんだな。

学習過程を振り返り、学習に取り組んだ自己の変容をとらえて、肯定的な自己存在感・自己成長感・自己効力感・成就感を味わい、学習したことの意味を自覚して、さらなる学習への意欲や問題意識をもつ。

体験的な学習や、課題解決的な学習に取り組むことで、課題についての設定能力や選択能力、学習過程の反省能力などの学び方やものの考え方や、コミュニケーション能力、表現力、人間関係調整力などの実践的な課題探究力を身に付ける。

課題探究

- ・ うーん、うまくいかないな・・・どうすればいいんだ？
- ・ あっ。こうすればいいのか！
- ・ これはもっと詳しく調べてみる必要があるな・・・

自己認知

教師の指導・援助や生徒同士の意見交換のなかで、過去の経験や

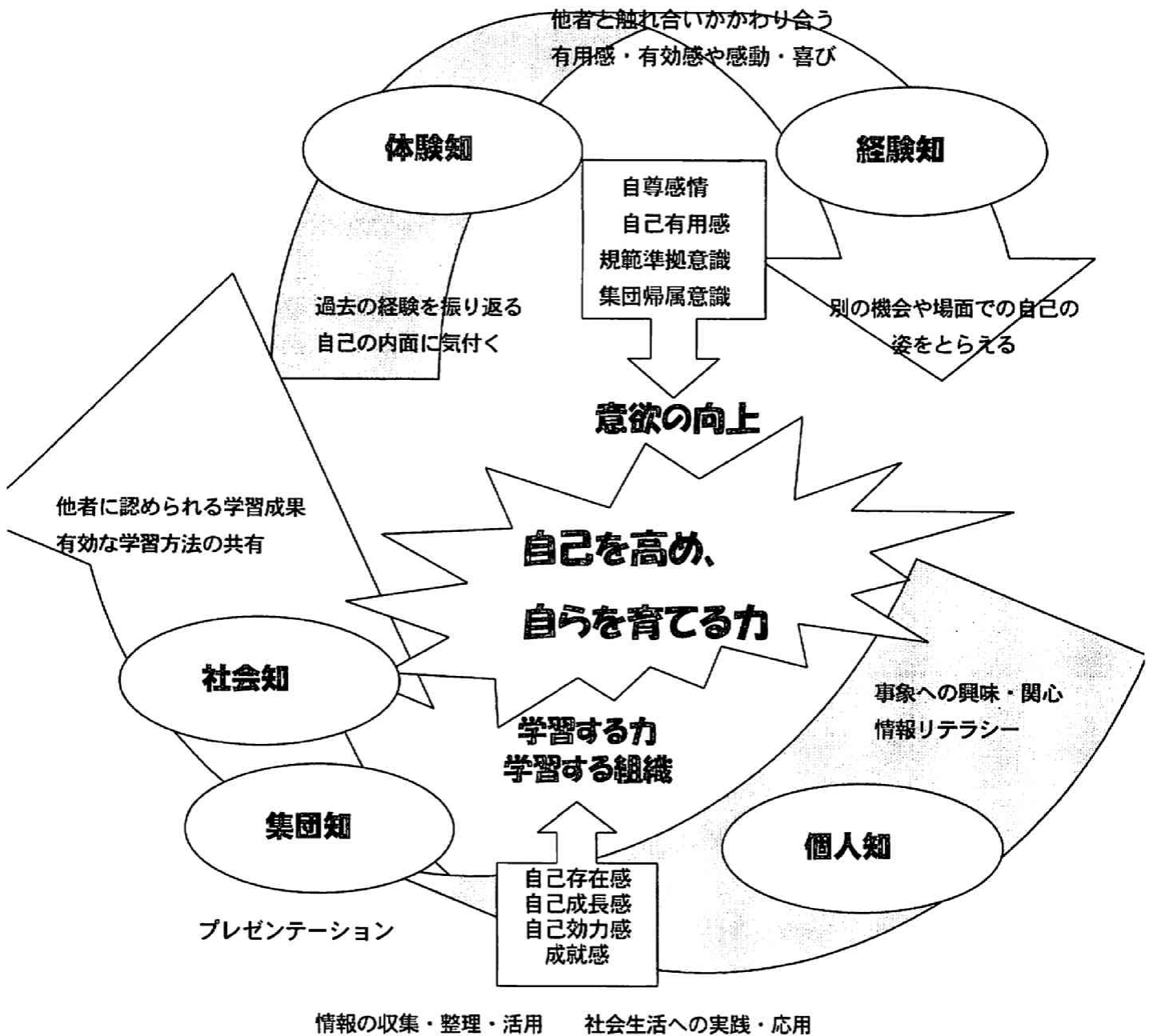
学習体験などを見つめ直し、興味・関心の在りようや、特徴を分析し、学習にのぞむ自己の姿を把握する。

- ・ あの時の疑問を明らかにしてみようかな・・・
- ・ 今までサボりすぎてたなあ・・・ちょっと何かやってみるか。
- ・ まだ調べ切れなかったから、継続して完成させようかな・・・

また、生徒が自分のよい点や学習に対する意欲、進歩の状況を捉えて評価を行うためには、学習の到達目標を示したり意義付けをしたりすることが必要であり、次の研究仮説を考えた。

研究仮説2 「総合的な学習の時間」の学習活動の特質に応じて、生徒の学習段階の高まりを体験知から経験知、個人知から社会知に向かうと捉えることによって、教師、生徒、第三者による相互の評価の観点が明確になり、生徒の学習や発達を促し、自己教育力を高められる。

学習の到達目標と学習活動の関連



3 研究のねらい

総合的な学習の時間では多様な学習活動を設定することが期待されているが、本研究に当たっては、生徒の学習経験や学習への意欲・関心などに応じて、総合的な学習の時間の学習活動を「体験的な学習を重視した総合的な学習」と「課題探究を重視した総合的な学習」の2類型に焦点化して研究を進めることとした。そして以下のような研究のねらいを設定した。

- (1) 2類型の学習活動の学習活動の特性に応じて、生徒の学習段階の高まりを、「体験的な学習を重視した総合的な学習」では体験知から経験知、「課題探究を重視した総合的な学習」では個人知から社会知にむかうものとして学習の到達目標や意義付けを行い、これに見合った適切な学習活動を構想することで目指す生徒像の育成を図ること。
- (2) いずれの総合的な学習の学習活動計画の作成に当たっても、育成することを期待して指導のねらいとする「育成する力」や、「育成する力」を学習活動や学習内容に即して具体化し評価の観点ともする「生徒の活動」を共通して重視すること。生徒が学習の到達目標を理解して学習活動に取り組むように「育成する力」を生徒に示すこと。また「生徒の活動」を設定することで、1単位時間やひとつの学習の節目ごとに教師が指導・援助を行なう対象生徒を明確にして、指導の方向性を見出し、適切な援助を行なうことができるように「生徒の活動」を設定すること。これらを学習活動計画に具体化すること。
- (3) 生徒の学習の発展段階を自己認知、課題探究、自己評価の3段階で構想することを踏まえて、学習活動計画の作成に当たっては、教師や生徒が学習の発展段階を適切に把握し、次の段階の学習課題を適切に設定することができるようにステップをⅠからⅢに区切りを付けて設定すること。また、学習の終末期に多様な評価活動を取り入れ、学習の振り返りを促したり、学習状況のアセスメントを行うことによって学習の到達を把握して、継続性や発展性を考慮した指導と援助を行なったりすることで、生徒が学習の意義を把握して成就感や達成感を味わい、在り方生き方を考察する学習へと発展させていくこと。

また本研究では、生徒の学習段階や学習の質の変化を、次の語句を用いてとらえた。

<p>体験知：生徒が、対象とかかわりあい体験することによって得られる個々の知見。</p> <p>経験知：さまざまな体験を重ねることで、生徒の内面に積み重ねられ統一体として自覚される知恵。</p> <p>個人知：個人が学習の中で意識的・無意識的に身に付けた知識や知恵。</p> <p>集団知：個人知を組織的に集大成した知識や知恵。</p> <p>社会知：さまざまな形で表現されることによって、組織や社会などで役立つものとなる知識や知恵。</p>

III 研究の内容

1 体験的な学習を重視した総合的な学習の時間

(1) 学習活動や指導と評価の工夫

《関心・意欲などの情意的な力の育成を重視する》

体験的な学習を重視した総合的な学習の時間では、学習活動のはじめに生徒が現在の自分の姿を生徒にとらえることを計画した。体験的な学習のなかで成功・失敗体験を積み重ねることによって新たな自分の姿を発見したり自分の興味・関心や特性などについて自己認識が深まり、学習活動を通して達成感・成就感・自己肯定感が生まれ、学習活動の活動のまとめの段階で自己の在り方・生き方を考えるようになることを目指した。体験的な学習においてはぐくまれた生きる意欲や学習への関心・意欲などの情意的な力は、次の課題を解決しようとする資質や能力の土台となり、自己教育力の基礎となるものである。

《体験知から経験知に高める学習過程の構想》

ステップ I（自己認知）からステップ III（自己評価）までの段階を次のように計画した。

ステップ I は学習への動機をもつ過程である。オリエンテーションの中で話を聞いたり、ビデオを見たりしながら、生徒は体験への見通しをもち学習の準備をする。活動を想像したり予測したりすることで好奇心が刺激され、体験への期待・興味をもち動機を高めていく。この過程で、生徒は感想や期待・不安といった形で学習活動と自分との距離を測ろうとする。教師は情報を収集し、整理し、施設と生徒の双方に十分に伝えると共に、生徒が感じ始めている不安を、自己認知の芽生えとして受け止め、アドバイスをする。

ステップ II は体験的な学習に取り組む過程である。他者と話し合う、助け合うなどのかかわりあいを通じて、他者の立場に立って考えたりしながら活動に取り組む。生徒は失敗・成功を繰り返しながら他者とのかかわり方やかわろうとする自分の姿を見つめるようになる。課題探究と自己認知の深化は相互補完的である。教師は活動を十分観察し、一人一人に応じて声をかけ、個人やグループ内で解決策を考えるためのヒントを示すなど、課題追究のうえでの必要性を見極め、必要に応じてアドバイスする。

ステップ III は活動を振り返る過程である。自分の活動を時系列にまとめ、自分とかかわりあった他者や自分の姿を振り返り評価していく。発表を行ったり、他者の発表を聞いたりする中で自分や他人のよさに気付く。教員は生徒を肯定的に受け止め評価し生徒が自分のよさに気付くように助言し、また、課題を追究してきた到達点を示して生徒が達成感・成就感を味わうことができるような機会や場を作ったりアドバイスをしたりする。生徒の向上心が高まり、意欲が生まれ、新たな課題を解決していこうとする自己教育力が生まれる。

《評価の方法と工夫》

- 1 ワークシートやポートフォリオで自己を分析することで、客観的に自己を評価する力を身に付けることができる。
- 2 教員の観察、グループ内評価の他に施設利用者・職員など他者の評価を参考にすることで、多面的な自己評価・柔軟な自己理解をすすめることができる。
- 3 学習の過程における評価は、生徒にとって、自らの状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促す。生徒が自己を評価する力を身に付け、自分の能力・適性を自分で確認し、将来を探究できるよう評価活動を工夫することが大切である。

(2) 学習活動の展開

	育成する力	学習活動と指導の具体例	生徒の情意面の変化
ステップⅠ 体験への準備	マナー 想像力 計画力	施設訪問の場合 学校でのオリエンテーション/施設概要/訪問にあたっての諸注意 施設でのオリエンテーション・見学説明	(自己認知) 受動的な興味関心 期待・不安
ステップⅡ 体験知	コミュニケーション能力 判断力 振り返る力 問題解決能力	施設利用者との交流、作業、活動 個人・グループ活動の反省と改善策	(実践) 自発的な興味関心 (問題解決体験)
ステップⅢ 経験知・次のステップへ	理論的思考力 自己認知力 自己表現力 在り方生き方の構想力 向上心	自分の活動のまとめ お礼状書き、グループでの活動のまとめ 全体でのまとめ、発表評価	失敗感 成功感 自己評価 自己認知の深化 達成感 成就感 自己肯定感
	自己教育力		意欲

生徒の活動	評価の観点	評価活動・方法	教員の役割
<p>自分を振り返る</p> <p>自分の経験と照らし合わせて想像する</p>	<p>イメージがわいた</p> <p>興味がわいた</p> <p>挑戦する気が起きた</p> <p>マナーの大切さがわかった</p>	<p>自己評価</p> <p>ワークシート ポートフォリオ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を収集と整理しそれを生徒と訪問する施設の双方に十分に伝える。 ・生徒の不安を受け止め、適宜アドバイスする。
<p>相手の立場を考える</p> <p>計画を実践しようとする。</p> <p>問題が起きたら自分で解決しようとする。</p> <p>中間同士助けあう。</p> <p>教師や施設指導員にアドバイスを求める。</p>	<p>問題を発見した</p> <p>問題に対処しようとした</p> <p>人のやり方を見て自分のやり方を直した</p> <p>場に応じた行動ができた</p>	<p>観察</p> <p>グループ内評価</p> <p>自己評価</p> <p>ワークシート ポートフォリオ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・活動を十分観察する。 ・なるべく個人、グループ内で解決策を考えるよう促す。 ・生徒の自己評価をよく把握する。 ・必要に応じてアドバイスする。
<p>自分の活動全体を振り返る。</p> <p>まとめる。</p> <p>自分のよいところ、友達の良いところに気づく。</p>	<p>自己理解が深まった</p> <p>他者理解が深まった</p> <p>自分の活動をまとめられた</p> <p>発表は上手にできた</p> <p>次の学習課題や目標をもつことができた</p> <p>達成感・成就感がもてた</p> <p>向上心が芽生えた</p> <p>自分の在り方生き方を考えられえた</p>	<p>観察</p> <p>他者による評価</p> <p>自己評価</p> <p>ワークシート ポートフォリオ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や他人のよいところに気づかせる。 ・生徒の活動・まとめを肯定的に振り返り生徒が達成感や成就感をもつことができるようアドバイスする。 ・課題・目標を見つけ、具体化するよう援助する。 ・自己の在り方生き方を進路にか らめて考えられないか促す。

(3) 実践の記録 (福祉体験から在り方生き方を考える)

実践の概要 : 平成14年5月から 平成15年2月
都立高等学校 第2学年6名 第3学年8名
学習のテーマ : 「福祉体験的な学習で自分発見」
学習活動概要 : 学校の近隣にある知的障害者入所施設 (成人対象) で介護体験に取り組み、活動を振り返る学習を通じて、障害のある方や福祉施設で働く方々とのかかわり合いのなかで自分自身を見つめ直し、自ら成長していこうとする意欲を育てる。
評価の観点 : 1 障害のある方や福祉施設で働く方と進んでかかわろうとしている。
2 取り組んだ活動を丁寧に整理したり、整理したことを振り返ろうとしている。
3 活動を通して感じたことや考えたことを、今の自分の姿とかかわらせて考えようとしている。
4 自分のこれからの生き方を活動をもとに、より深く大きな視点をもって考えようとしている。

ア 生徒の活動の経過とその様子

生徒の活動の様子を○で示し、学習活動のなかで見られた声を吹き出しで表した。

ステップ1 (自己認知)

学校にて

- オリエンテーションで教師から活動の説明を聞いた。
- ワークシートで今の自分を振り返り、その後の施設での活動について考えた。
- 訪問する施設の概要を知った。

(障害者施設について、場所、入所者、活動内容)

- 施設訪問の際の諸注意を聞いた。(持ち物、服装、施設職員の指示に従う必要性)
- 知的障害について知った。(障害の原因、状態、重複する障害、配慮事項等)

- ・ 自分はきらい。
- ・ 本当にやりたいことを見つけたい。
- ・ 誰かの役に立ちたい。

施設にて

- 施設についてのオリエンテーションを受けた。
(施設内見学、入所者との対面、施設での生活について、活動する上での諸注意)
- 施設入所者についての疑問を職員に質問した。

生徒は入所者の生活を想像しながら、様々な質問を職員にぶつけることによって、入所者の生活についての理解を深めた。

- ・ 皆、なぜ、施設に入所したんだろう？
- ・ どうして駅の近くに建てないのか？
- ・ 恋愛や結婚は？

障害に応じて施設での生活の工夫があるんだ。

- 自分たちが施設の入所者にできることを考えた。
生徒は入所者の生活を知り、具体的に自分達でできることを考え、施設の職員に相談する。

- ・ 友達になって、おしゃべりやドライブ、ショッピングなどできないだろうか？

ステップII (課題探究)

施設訪問 2回目・3回目

- 施設内で行われている三つの活動に参加。下記の三つの活動から生徒は自分の参加したいものを選択し活動に参加した。
①軽作業としてボールペン組み立て、コンセント組み立て。②音楽活動としてリトミック、身体表現、音楽療法。③菓子作りとしてクッキー作り。
- ポートフォリオで活動を振り返り、次回取り組むことを明らかにした。



学校にて

- 自分達の活動の面白さを感じ、それを他の人に伝えたいという希望を持ち、文化祭での発表を計画した。
- 障害について、より理解を深めようという意欲が高まり、重複障害について調べた。
- 文化祭で施設の紹介や活動の様子を展示発表した。
- 学校への招待を通して、より活動を深めたいという意欲が高まった。



施設訪問 4回目

- 2・3回目と同様の活動をした。
- 学校で活動することを施設に提案し、後日、了解を得られた。

学校での活動実現

- クリスマスに向かってツリーとリース作りを企画し、実施した。
- 学校がバリアフリー化されていないこと等に気づいた。
- 入所者・施設職員に喜ばれたことが、達成感につながった。



ステップIII (自己認知の深化)

まとめ

- 評価表に基づいて自己評価し、友達・施設職員・教員の評価と合わせて自己認知を深化させた。

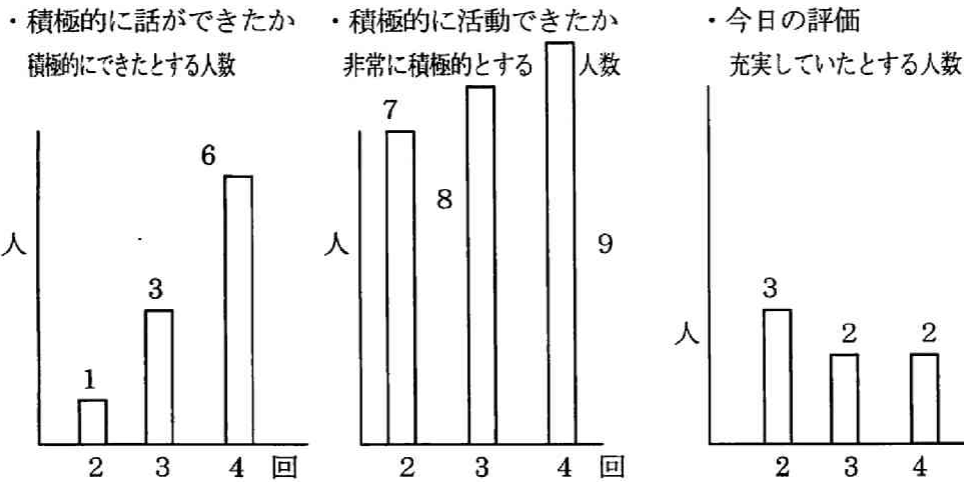
知らない人とも積極的に話せた。

自分の意外な面を発見できた。

職員は自分達と同世代で、明るくてやさしい。私もなりたいたい!

イ ポートフォリオ、中間まとめからみた生徒の変化

① 毎回の活動のポートフォリオの変化を次の観点でまとめた。

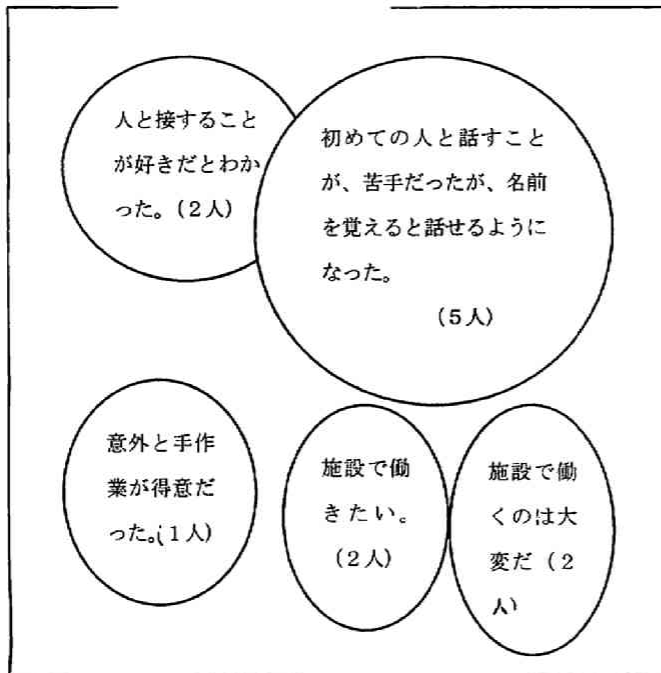


いつでも積極的に活動しようとしていることがわかるが、自分の活動に対する評価は、回数を重ねる毎に厳しいものになっている。楽しく活動できたことを評価するだけでなくもっと何かできないか考え始めていた様子が伺える。

「積極的に話ができただか」という項目の中には、非言語のコミュニケーションも含まれている。したがって、話ができたと答える生徒が増えたことには、非言語のコミュニケーションの工夫し、実行できたことも含まれていると思われる。

② 中間まとめから

自分のことについて



自分の今まで気付かなかった面を発見したという生徒が約4割いた。初めての人と話すのが苦手という意識はほぼ半数の生徒がもっていた。相手の名前を覚えることでより、親しさが増し、話しやすくなることを学ぶことができた。

障害者について

- ・明るく笑顔がきれい
- ・仲良く、思いやりがある
- ・積極的
- ・自分の考えをもって、素直でまっすぐな人たち

(4) 研究全体との関連

ステップⅠ 自己認知

施設で活動を経験するまでは自分を消極的なイメージでとらえている生徒が多かった。「誰かの役に立ちたい」という気持ちを持ちながら、実際には何をしてもよいかわからなかったり、自分にできるのかという自信のなさが表情や態度ににじみでていた。

また、自分のよさをなんとなく感じながらも、自分でそのことを認められない様子もみられた。

ステップⅡ 興味、関心 問題解決体験

施設での活動が繰り返されると、知的障害について深く知ろうという関心が芽生え、書物等で調べるようになった。

障害者との積極的な関わりを求めて、コミュニケーションの仕方を考え、相手に応じた方法を試行錯誤していく。その中で、初めて会う人との関係づくりには名前を覚えることが有効であることに多くの生徒が気づき、名前を覚え、呼ぼうとしていた。

施設利用者との関わりが深まるにつれ、生徒はより楽しめる活動を自分達で考え、提供したいと意欲をもつ。学校に招待し、クリスマスの飾りを一緒に作ろう、という積極的な発案がされ、実現することができた。利用者には想像以上に喜んでもらった。これが、生徒の喜びにもなり、さらに積極的な活動が引き出された。自分達の活動が利用者の笑顔や喜びで評価され、次の活動への意欲に結びついていった。帰ろうとする生徒に別れを惜しみ涙を流す利用者に、手をとってなだめたり励ましたりする言葉かけや、再度訪問したいという気持ちを告げる生徒もいた。生徒は障害者とのかかわりのなかから自分達にできることを模索するようになった。

ステップⅢ 自己認知の深化

自分の意外な積極性やこれまで発揮されなかった他人への思いやり、優しさといったものを自分で認識し、自分の長所として、人に言えるようになってきたことは大きな生徒の変化であった。

また、漠然としていた福祉関係の仕事を具体的に知り、自分の進路を考える機会にもなった。

感情表現が非常にストレートな知的障害者との出会いによって、人を喜ばせることの喜びを知った。そして、それが積極的な人間関係を成立させようとする努力につながった。障害者の施設での生活、施設職員の仕事などこれまで知らなかった多くの人の生き方を知り、自分を見つめ直す機会になった。最後の学習のまとめでは、活動の成果を認め合い、この経験を今後、どういかしていくか話し合っていた。また、人としての幸福や素晴らしい人生についても考えてみたい。

(5) 実践に当たったの資料

この評価表をもとに各自の活動を振り返り、自己評価を行うとともに他の生徒、施設の職員や教員等の他者による評価も加え、まとめを行い、今後につなげていくようにする。

総合的な学習の時間		評価表			
		年	組	番	氏名
1	挨拶やマナーに注意して活動できたか？	良くできた	できた	できなかった	
2	自分なりにくふうし、考えて活動できたか？	良くできた	できた	できなかった	
3	友達と協力できたか？	良くできた	できた	できなかった	
4	活動中の疑問等を自分で調べたり解決しようと努力したか？	とてもした	した	しなかった	
5	友達のいいところを発見したか？	発見した		発見しなかった	
6	自分のいいところを発見したか？	発見した		発見しなかった	
7	自分が直した方がいいところを発見したか？	発見した		発見しなかった	
8	自分の将来について考えたか？	発見した		発見しなかった	
9	これからやってみたいこと	考えた	少し考えた	全く考えなかった	
10	総合評価	積極性	とても積極的	積極的	積極的でない
		成果	とてもあがった	あがった	なかった
成果とは具体的にどのようなことか？					
友達の評価					
施設職員の評価					
教員の評価					

2 課題探究を重視した総合的な学習の時間

(1) 学習活動や指導と評価の工夫

《情報活用や問題解決などの認知的な力の育成を重視する》

課題探究を重視した総合的な学習の時間では、生徒が生涯にわたって主体的、創造的に課題解決に取り組む土台となる力を「自らを高め、自らを育てる力」としてとらえ、こうした力を育成する手立てとして、情報を活用し表現する「プレゼンテーション」活動に着目して学習計画案を作成した。

《個人知から社会知に高める学習過程の構想》

ステップⅠ（自己認知）からステップⅢ（自己評価）までの段階を次のように構想した。

ステップⅠは「課題設定と探求の段階」である。ここでは「自己認知力」や「発想力」、また「情報活用能力」のうちの収集力を育成するために、自分の漠然とした興味・関心を問題意識に高める、学習課題の意義を発見し課題解決の見通しをもつ、課題解決に役立つ有効な手段や方法を見付け情報の収集を行う、という学習活動を設定した。生徒が自分の興味・関心の持ち方や、何をどれだけ知っているか、また何ができるかを確認したり（自己認知）、設定した課題について（発想力）情報検索方法を学びながら課題解決に見通しを立てて情報収集を行ったりする（情報活用）という流れである。

ステップⅡは「情報の整理と活用の段階」である。ここでは物事を考えていく「省察力」や「情報活用能力」を育成するために、収集した情報の真偽と価値を考える、情報を精選し保存・整理する、情報を加工し発表の準備をする、という過程を設定した。生徒は、収集した情報が自分の目的に照らして適切なのか、正しい情報かどうかを分析・判断・選択する（省察力）。そしてそれらを利用しやすい形で保存・整理し、情報を第三者に伝達しやすくするために数値化やビジュアル化などの加工を施し発表の準備を行う（情報活用）という流れである。

ステップⅢは「表現・振り返り・発展の段階」である。この段階ではまとめの活動として必要な、目的・相手・場面に応じた表現方法を選択する、効果的に伝える、相互評価によって学習成果を確認する、学習したことに意味を見出す、という過程を設定した。生徒はプレゼンテーションに取り組むなかで、相手を意識したり相手の意見を聞いたりしながら、自分の思いや考えを見直すことを通じて、学習成果に意味を見出す。それは次の学びへの意欲につながり、獲得した有効な学習方法とともに「学びの力」を高めていく。他者の学習成果を自己の学びに採り入れ、自分の学習成果も他者に活用される学習活動は、生徒に「個人知」を「集団知」に高め、さらに「社会知」に高めていく経験をもたらすものとなる。

《評価の方法と工夫》

評価の方法としては、自己評価を中心として、相互評価や第三者による評価を組み合わせた。評価の観点、生徒が学習の意味を把握することが出来るように、それぞれの段階でねらいとする育成する力を重点項目として提示することとした。自己評価にはアンケート・ポートフォリオ・ワークシート・感想文、相互評価には評価シート・反省会、第三者による評価には講評・アンケート等を用いた。これらの多様な評価活動を通して、絶えず学習の振り返りと学習内容の補足・修正を行うこと、学習活動の深化に伴い主観的で根拠が薄弱な自己に対する評価を次第に客観的な裏付けを伴った評価へと変えていくこと、自己の変容を肯定的に評価することでさらなる学びへの意欲や問題意識を高めることができるように評価活動を工夫した。

(2) 学習活動の展開

		育成する力	指導内容の具体例	生徒の活動
個人知	導入	[メタ認知]力 自己認知力	<ul style="list-style-type: none"> ・「総合的な学習の時間」で学ぶこと・育成する力についての説明 ・評価方法についての説明 ・事前アンケート 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 自分の現状を認知し、過去の学習との関連づける。 </div>
	発見	発想力	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレインストーミング ・KJ法 ・アンケート調査 ・インタビュー 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 興味関心の整理、問題意識を明確化して、課題を設定する。 </div>
	探求	情報活用能力(収集)	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館の利用法 ・パソコンの活用法 ・インターネットの利用 ・情報がどこにあるか・誰が知っているかを見つける訓練 ・計画性をつける訓練 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・課題解決の手段・方法の学習。 ・課題解決のために必要な情報を収集する。 </div>
集団知	整理	省察力	<ul style="list-style-type: none"> ・カードによる情報の整理 ・パソコンによる情報の整理 ・キーワードによる情報の整理 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・利用しやすい形での情報の保存。 ・情報の分類と選択、利用しやすい形での整理を行う。 </div>
	活用	情報活用能力(分析・判断・選択・整理・加工・蓄積)	<ul style="list-style-type: none"> ・情報の裏付けとなる資料の収集 ・情報を自分の知識に変換し、人に伝えやすくする工夫(言語化・数値化→Visual化) ・文章の単純化の練習 ・CMの研究、広告作成練習 	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・情報の加工と活用方法の工夫、研究内容の追加と修正を行う。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 調査・研究方法の見直し。 </div> </div>
社会知	表現	プレゼンテーション能力	<ul style="list-style-type: none"> ・表現方法の工夫 ・レポート作成 ・プレゼンテーションソフトの利用 ・ディスカッション・ディベートなどによる発表 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に分かりやすく伝えるための工夫 ・リハーサル ・補足・修正 ・プレゼンテーション </div>
	振り返り	自己表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション(校内発表会、文化祭、ホームページなど) 	
社会知	発展	自己教育力	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価・相互評価による反省 ・学習活動全体を振り返ってのアンケート 	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・記録・評価をもとに学習内容を振り返る。 ・成功・失敗の理由の考察 ・新たな自己を発見する。 ・学習成果と自己のあり方生き方を結びつける。 ・自ら学び問題解決しようとする。 </div>
		次の学びの [メタ認知]力	<ul style="list-style-type: none"> ・教員による総合評価 	

評 価 の 観 点	評 価 活 動 ・ 方 法	
	主観性の強い評価	<p>〈評価資料〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自己理解アンケート ○ポートフォリオ ○ワークシート ○活動の観察 <p>診断的 自己評価</p> <p>相互評価</p>
		<ul style="list-style-type: none"> ○ポートフォリオ ○ワークシート ○評価シート ○活動の観察 <p>診断的 自己評価</p> <p>相互評価</p> <p>形成的 自己評価</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを的確に表現する工夫ができた ・相手に自分の考えを伝えることができた <p>◎課題の解決ができた</p>		<p>総括的 自己評価</p> <p>↑ ↓</p> <p>相互評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ○活動の観察 ○ポートフォリオ ○評価シート ○感想文
	客観性を活かした評価	<p>第三者による評価</p> <p>↑ ↓</p> <p>自己評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ○第三者の評価・講評

(3) 実践の記録 (情報活用と表現体験から課題解決を図る)

実践の概要 : 平成14年 4月中旬から 6月中旬
都立高等学校 第2学年 10名

学習のテーマ: 「海外発見! バーチャル旅行」

学習活動概要: 海外旅行をすることを想定して、自分なりに旅行の目的や見所を定め、必要な情報をさまざまな方法で収集し旅行の計画にまとめ他者にわかりやすく伝える活動に取り組む。他者とのかかわり合いのなかで自分の考えを発展させるとともに情報活用の方法を身に付けることで、自ら学ぼうとする意欲や学び方を身に付ける。

評価の観点 : 1 自分なりに想定した計画について必要な情報を考えている。
2 他者の意見を聞きながら、自分の不足している点や補充が必要な点を見つけ出している。
3 できるだけ多くの情報源から情報を得ようとし、具体的に行動している。
4 聞き手や読み手を意識しながら発表内容を整理したり、発表方法を工夫しようとしている。
5 情報を収集し活用することについて、自分なりに分かったことや気づいたことなどを学習に生かそうとしている。

ア 生徒の活動の経過とその様子

ステップ1 (自己認知)

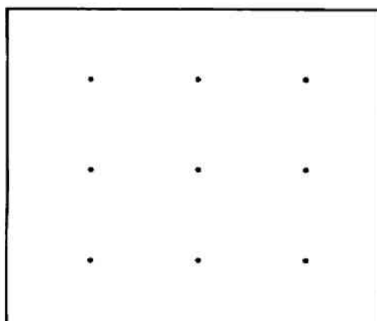
- オリエンテーションで教師の説明。
- 「自分の可能性を知る」「先入観でものを見ない」「勝手に自分の常識を作らない」ためのエクササイズに取り組む。



課題例

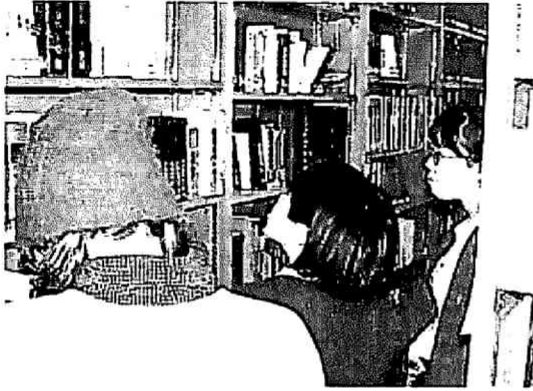
左の9つの点を4つの直線で結びなさい。

ただし、鉛筆で直線を書き始めたら、紙から鉛筆を話すことはできません。



この課題では多くの生徒が悩んでいた。九つの点をじっと見つめているとどうしても正方形に見えてしまうようで、それを1つの枠としてしまうともうこの問題を解くことはできな

い。自分の先入観でものを見てしまうと様々な可能性が見なくなるので、与えられた条件や制約は何なのか?自分たちの持っている常識とは何か?など生徒に考えてもらうきっかけとした。



○調べる内容を具体的にはっきりさせ、計画性をもって、調査を進めた。

○ブレインストーミングをしながら、他人の意見に耳を傾けた。

○自分の考えたことを他人に伝えた。

○KJ法を使って、情報を整理し、何を調べたらよいかはっきりさせた。

○インターネットでの情報検索・図書館での情報収集・旅行代理店でのパンフレット収集・実

際に旅行した人からのインタビュー等をしてしながら、情報収集をした。

ステップII（課題探究・情報活用）

○自分の得た情報をコンパクトにまとめた。

自分の収集した情報を一言で相手に伝えることができるように工夫した。

○新聞記事を読み、それにタイトルを付けた。

○矛盾した情報の真偽を確かめ、自分自身の情報にする。

様々な文献やインターネット検索などをしていると、例のように矛盾した情報を入手することも多い。

例) シンガポールの物価に関する情報

①日本と同じかそれ以上。特に酒、タバコは高い!

②日本よりは物価は安い。

シンガポールと日本のたばこやお酒の値段、自分たちの身の回りにある商品で具体的に比較をしてみた。

○自信をもって自分の調べたことを発表するための準備をした。

○ 発表・表現方法の演習

①レポート作成の練習

自分の伝えたい内容を的確に文章で表現する練習。

文字の羅列にならないよう図・表・写真を用いたヴィジュアル化の工夫。

②プレゼンテーションソフトを使った表現方法の練習

この学習では基本操作の練習を重視した。キーボード操作・文字の挿入・ページレイアウト・アニメーションの挿入・ページ切り替えの設定などを練習した。はじめはパソコンの操作になれていなかった生徒でも、絵を描くようにスライドができあがっていくのを体験するうちに、自分のプレゼンテーションのイメージができあがってきた。

文字ばかりの画面から図・表を入れたもの、さらにはイメージを絵で表現してそれにアニメーションを加える生徒など、生徒の自由でのびのびとした発想が活かされる場面となった。また、スライドを作成していく中で自分たちが調べたデータが不足していることに気づいた生徒や、人に自分のもつ情報を伝えることの難しさを感じた生徒も出てきた。表現する活動に取り組むことを通じて、自分の表現内容や表現方法の十分でない点や、さらに補足していく点などを見つけることによって、情報活用が自分の考えや思いを深めてい

くことに気づき始めていた。

ステップⅢ（自己認知・プレゼンテーション能力）

○プレゼンテーションの方法について考えさせる。

プレゼンテーションソフトを利用する方法

OHPを利用する方法

ポスターを作成する方法

パフォーマンスを見せる方法

ディベート・パネルディスカッション

○情報をわかりやすく的確に人に伝えられる方法や、自分の得意な方法を考える。教師は次の点を丁寧に指導・援助した。

声・・・声の大きさは、その発表者の自信の現れなので、会場や聞き手の状況にあわせて適切な大きさや速さ、抑揚で発表する。

表情・・・表情も、発表者の自信とやる気が見れる。聞いてほしいという気持ちが表れるような多少の笑顔と、自信を表に出すような生き生きとした表情で発表する。

アイコンタクト・・・聴衆 一人一人と視線を合わせる。

ボディランゲージ・・・発表者がたとえ大きな声で、生き生きとした表情で発表していても、ただ突っ立っていたのでは聴衆も飽きてしまう。そこで、ボディランゲージやジェスチャーを利用して、より聴衆の興味を引くような発表をする。

発表時間・・・プレゼンテーションでは、ほとんどの場合に発表時間があらかじめ決められている。発表者は必ずこの発表時間を守らなければならない。そのためにはリハーサルを十分に重ねて、自分の話す速度を確認しておくことが重要。

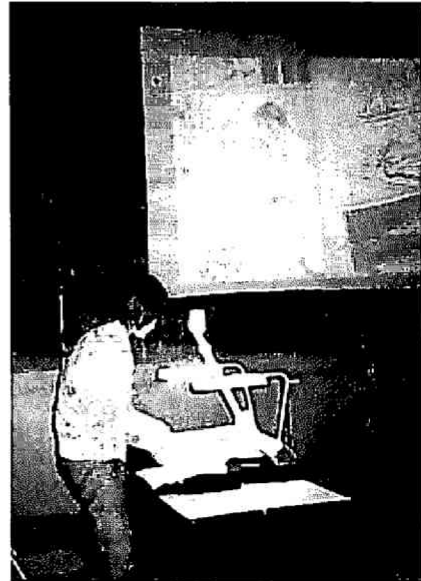
質疑応答・・・質問されるときには必ず一度は質問者と目を合わせ、質問者が何を聞きながら聞いているのかをその人の立場に立って考えて、答えるようにする。例えば、Yes/Noで聞かれた場合には、まず始めにYes/Noで答え、それからその理由を述べる。

○発表後、自己評価・相互評価をする。

自分のよかったところを見つけさせた。「調べたことを発表できるまでまとめることができた。」「もっと・・・を調べておけば良かった。」「話をしている内に・・・はどうなんだろう。」という反省が多く見られ、次に取り組むべき学習課題を見つける姿が見られた。

○次の学習のキッカケを与える。

教師からは、自分の調べたことを発表できたという自己肯定感を与えながら、調査が足りなかったことや自信をもって発表できなかったこと、他の生徒の発表をみて、自分に欠けていたことなどのマイナス面もとらえて振り返り、次の学習課題を生徒に確実に意識させるようにした。



(4) 研究全体との関連

自分の調べた内容を人に伝える・プレゼンテーションするという活動が自分の今までの学習活動を振り返り、新たな学習課題の設定につながると考えた。

プレゼンテーションの中で生徒たちにはおどおどした表情が見られたり、自信がない様子が伺える態度であったりした。それに対して、「何が原因なのか？」を考えることで「今、自分にとってやらなければならないことは何か。」が見えてくるような教師や生徒同士の相互評価が大切になってくる。さらに調査を進めなければならない生徒・新たな課題を発見した生徒・プレゼンテーションの方法を工夫しなければならない生徒など生徒一人一人がもつ課題は多様なものになってくるが、教師が学習の発展段階を見すえ適切な指導助言を行うことや、学習活動の展開例にあるさまざまな表現方法の練習などを行うことにより、次第に自信をもって学習課題を明確にして課題解決に取り組み、生徒の自己教育力が高まっていくと考える。

(5) 実践に当たっての資料

資料①授業実施前アンケート

「総合的な学習の時間」では次のことを学びます。

課題の見つけ方

- 取り上げる課題についての学習計画の立て方
- 情報の集め方・調べ方
- 情報のまとめ方
- 発表の仕方
- 自分の学習成果を振り返る

この学習を始めるにあたり、みなさんの今までの学習経験に対する質問をアンケートにまとめたので回答してください。

	はい	どちらでもない	いいえ
いろいろなことに興味がある。			
新しいことにすぐtryしたくなる。			
分からないことはそのままにしておけない。			
自分で課題を見つけ、学習したことがある。			
計画的に何でもやる方だ。			
情報を集める方法・手段をたくさん知っている。			
人とよく情報交換をする。			
情報が正しいかどうか調べる。			
自分の調べたことを発表したことがある。			
自分の考えを人に上手に伝えられる。			

資料②授業実施後アンケート 総合的な学習の時間 自己評価表

評価項目	評価基準				
① テーマ設定及び学習計画について					
・ 自分が調べたいと思うテーマを決めることができた	5	4	3	2	1
・ 課題の内容を理解して自分のテーマを設定できた	5	4	3	2	1
・ 効率よく情報を調べるための計画が立てられた	5	4	3	2	1
・ 時間配分を考え、指定された期間内に学習を終えることができた	5	4	3	2	1
・ 効果的に発表するための計画が立てられた	5	4	3	2	1
② 情報・資料の集め方及び調べ方について					
・ どこで情報・資料を集めるとよいかという手段がわかった	5	4	3	2	1
・ どのように情報・資料を集めるかという方法がわかった	5	4	3	2	1
・ 有効な情報・資料を集めることができた	5	4	3	2	1
・ 協力して情報・資料を集めることができた	5	4	3	2	1
・ 学校内外の施設や設備を有効活用して情報・資料を集められた	5	4	3	2	1
③ 情報・資料のまとめ方について					
・ 情報交換を行い有効的な情報・資料としてまとめることができた	5	4	3	2	1
・ 必要な情報・資料を整理することができた	5	4	3	2	1
・ 必要な情報・資料を選択して用いることができた	5	4	3	2	1
・ 協力してまとめることができた	5	4	3	2	1
・ 工夫や特色のあるまとめ方ができた	5	4	3	2	1
④ 発表・まとめの仕方について					
・ 発表・まとめの仕方や方法がわかった	5	4	3	2	1
・ 効果的な発表・まとめができた	5	4	3	2	1
・ 計画通りに自分たちの表現を行うことができた	5	4	3	2	1
・ 聞いている人たちが理解できる発表・まとめができた	5	4	3	2	1
・ 資料や作品をうまく活用した発表・まとめができた	5	4	3	2	1
⑤ 他者(クラスメート)の理解について					
・ 相手にとってふさわしい表現ができた	5	4	3	2	1
・ 資料や発表が今後の生活において有効的に活用できそうだ	5	4	3	2	1
・ 外部(周囲)の人に自分(達)の学習内容がわかってもらえたと思う	5	4	3	2	1
・ 今回のテーマで再度、今以上に熱心に調査・研究を進めてみたい	5	4	3	2	1
・ 新たなテーマで調査・研究を進めてみたい	5	4	3	2	1
⑥ 取り組み及び自己満足度について					
・ 真剣に取り組むことができた	5	4	3	2	1
・ 自分なりに工夫することができた	5	4	3	2	1
・ 楽しく学習できた	5	4	3	2	1
・ やりがいがあった	5	4	3	2	1
・ 今回の調査・研究に満足することができた	5	4	3	2	1

IV 研究のまとめ

1 実践を通じて見られた生徒の変容

(1) 研究仮説1について

研究仮説1では、高等学校の総合的な学習の時間の学習過程を、自己認知、課題追究、自己評価の3段階で構想することによって、生徒が取り組む学習活動を豊かに構想したり、教師は効果的な指導や適切な評価を行うことができると考えた。

高等学校の総合的な学習の実施に当たっては、多様な生徒の興味・関心・知識をどう生かせるかが重要な課題である。そのためには、教師の指導を中心にした学習ではなく、教師が生徒の学習活動の進捗状況を踏まえて適切なアドバイスを行うことが大切である。生徒の学習の進捗状況を的確にとらえることやその方策を考える必要があり、3段階を考えることでひとつの尺度ともなるものを得ようとした。

体験的な学習を重視した総合的な学習の学習活動では、体験したことをもとにしながら、それを振り返り、自己認知を深めていく学習へと発展させていく学習活動を構想した。学習過程が進むにつれ活動に意欲的にかかわろうとし、積極的に提案をするようになる生徒の姿が見られた。教師の指導に当たっては、ステップⅠでは活動に対する生徒の抵抗感を取り除いたり、ステップⅡでは取り組んだことを前向きに評価し、ステップⅢではワークシートを用いたり学習の記録を用いながら生徒が自ら自己認知を深めていくことができるような指導を重視した。

課題探究を重視した総合的な学習の実施に当たっては、ブレインストーミングやKJ法などを用いて生徒が自分の考えの出発点を確認して学習活動に取り組み、最後にプレゼンテーションを行う学習活動を構想した。生徒は学習内容の発展過程を自覚したり、さらに調べておくべきことや新しい疑問を発見したりするようになってきた。教師の指導に当たっては、ステップⅠでは学習方法についてエクササイズを行い、ステップⅡでは学習過程に即して自己評価や相互評価をさまざまな形で取り入れ、ステップⅢではプレゼンテーションを行って課題探究の過程に適切な助言を行う指導を重視した。

(2) 研究仮説2について

研究仮説2では学習活動の特質に応じて生徒の学習段階の高まりをとらえることが必要と考え、体験的な学習を重視した総合的な学習では体験知から経験知へ、課題探究を重視した総合的な学習では個人知から社会知へという過程を構想し、さまざまな評価活動の観点とすることで生徒の学習活動はより充実すると考えた。

生徒の知的な活動の高まりを想定することで、生徒の学習状況を個に応じてとらえ、必要な学習の手立てをアドバイスしたり、学習が停滞した場合に適切に励ましていくことができるようになる。学習の終末段階で成就感や達成感を味わわせる評価活動のためにもこうした工夫は不可欠である。

体験的な学習を重視した総合的な学習では、学習活動のはじめの段階で意欲はありながら自分自身で何ができるかがわからないという生徒が、終末の段階で人とのかわりあい方について考えたり、自分自身の生き方を考えたりするなど、これからの自分の生き方についての知恵を身に付けるようになってきた。

課題探究を重視した総合的な学習では、自分の興味・関心にもとづいて設定した学習課題について情報を収集・整理してプレゼンテーションを行う過程で、情報の客観性や正確性、適切さを何度も考えるとともに、他者に伝える活動の中では聞き手を意識してわかりやすく伝える方法を工夫する学習に取り組んだ。自分の知りえたことやわかったことが他者に伝わったり、伝わりきらなかったりしたときに生徒は自分の知恵を広げていく場合の新たな課題を発見するようになってきた。

2 研究の意義と今後の課題

来年度からの新教育課程全面実施をひかえ、都立高等学校では総合的な学習の時間の実施準備が進められている。各学校が学校の特性や生徒の状況を踏まえ、特色ある教育活動の大きな柱のひとつとして総合的な学習の時間を構想し、実施していく必要がある。そのために総合的な学習の時間のねらいを具体化する学習計画や指導計画を作成することが求められる。

本研究では、学習計画や指導計画の具体化の手順として、総合的な学習の時間で育成する力の全体像を構想した上で、学習活動の特質に応じてどのような力の育成を図るのかをより具体的に明らかにするとともに学習の発展段階を3段階に構想して計画を作成した。そのことによって、一人一人の生徒の主体的な学習態度や学習活動をうながすことと教師の指導・援助とのかかわりを、教師も生徒も自覚化することが可能になった。計画作成の際に視野に入れるべき事柄が明らかになってきたことに意義があると考えられる。

本研究の実践の中では、学習活動を振り返って、次の学習課題をもととする関心・意欲の高まり、次の学習課題に取り組む際の適切な学習方法を選択していく力の高まりなどの生徒の変容が見られた。学習活動の特質に応じて評価の観点を工夫することや、学習の発展段階を3段階に構想しそれをステップとして学習計画に位置付けることなどが、こうした変容を促す適切な指導・援助を作り出してきたと考える。一人一人の生徒の多様な可能性を受け止めるためには教師の指導の基準、評価の観点などをもつことの必要性が確認できた。

本研究では、総合的な学習の時間における1学習課題についての学習活動計画や指導計画の研究を進めてきたが、生徒の変容をとらえるためには年間や学期など、さらに長い期間を通じての学習活動計画を立てる必要がある。この場合に本研究で考えた3段階の学習活動の発展段階の構想が妥当であるかについて検証の必要がある。また、「体験的な学習を重視した総合的な学習」「課題探究を重視した総合的な学習」ばかりでなく多様な総合的な学習の時間の学習活動も想定できる。この場合にどのような評価の観点を立てていくのかも今後の研究課題となる。総合的な学習の時間の指導に当たっては、学校の教職員の共通の理解や協力体制を作ることが不可欠である。とりわけ評価について、学習の終末段階での教師による評価を重視する必要がある。さらに評価方法・評価体制について実践的な研究と開発が必要であると考えられる。